

「大化の改新と壬申の乱」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 蘇我氏の横暴

今から 1400 年～1300 年前にあたる 7 世紀は、我が国において様々な出来事があった時代でもありました。

7 世紀の前半には、我が国初の女性天皇でいらっしゃる推古(すいこ)天皇の摂政となった聖徳太子(しょうとくたいし)によって、603 年には冠位十二階(かんいじゅうにかい)が、604 年には憲法十七条が制定されたほか、607 年には小野妹子(おののいもこ)を遣隋使(けんずいし)として隋(ずい)に渡らせ、対等外交を樹立するなどの輝かしい実績を残しました。

また、朝廷による中央集権体制を確固たるものとした大化の改新や、天皇中心の力強い国家体制をつくりあげるとともに、懸案となっていた外交問題を解決するきっかけとなった壬申(じんしん)の乱も、いずれも 7 世紀の半ばから後半にかけて起きているのです。

今回の講座では、聖徳太子以後の我が国の方針を決定づけた、7 世紀の「2 つの政変」について、様々な観点から詳しくご紹介したいと思います。

我が国のために内政・外交とも大活躍を見せた聖徳太子でしたが、622 年に 49 歳でこの世を去ると、彼の後ろ盾となっておられた推古天皇も、628 年に 75 歳で崩御(ほうぎょ)されました。

聖徳太子のご逝去と推古天皇の崩御によって、朝廷で蘇我氏(そがし)が再び政治の実権を握るようになりました。なお、当時の蘇我氏は、蘇我馬子(そがのうまこ)の子である蘇我蝦夷(そがのえみし)に代替わりしていました。

推古天皇の崩御を受け、後継を誰にするかで朝廷内での意見が分かれました。聖徳太子の子である山背大兄王(やましろのおおえのおう)を支持する声もあったのですが、結局は蘇我蝦夷が推す田村皇子(たむらのみこ)が、舒明(じよめい)天皇として即位されました。

舒明天皇の時代の大きな出来事といえば、初めて遣唐使(けんとうし)が送られたことが挙げられます。久しぶりに中華大陸の統一を果たした隋でしたが、無謀な外征や内政の混乱もあって、建国後わずか 30 年足らずで滅亡しました。そして 618 年に李淵(りえん)が隋にかわって大陸を統一し、唐(とう)を建国しました。

我が国は、隋と同じように唐に対しても文化の交流をはかるべく、630年に犬上御田鍬(いぬがみのみたすき)らを遣唐使として送りました。なお、遣唐使はその後も続きますが、ある出来事をきっかけに一時期中断しています。

さて、舒明天皇が641年に崩御されると、その後継には皇后の皇極(こうぎょく)天皇が選ばれました。我が国で二人目の女性天皇の誕生です。意外とも言えるこの流れは、聖徳太子の子である山背大兄王にしてみれば、今度こそ自分が天皇になると思っていただけに、納得がいかないものでした。

皇極天皇を後継にしたのは、蘇我蝦夷の息子(=馬子の孫)の蘇我入鹿(そがのいるか)でした。入鹿は自分の意のままになる天皇を選び、政治の実権を我が手に握ろうとしていましたが、そのためには優秀な山背大兄王の存在が目障りだったのです。

643年、父親である蘇我蝦夷から大臣(おおおみ)の地位を独断で譲られた入鹿は、返す刀で山背大兄王を攻め立てました。追いつめられた山背大兄王は、一族全員が首をくくって自殺するという非業の最期をとげました。ここに聖徳太子の血統は断絶してしまったのです。

あまりの凶事に、さすがの蝦夷も激怒しましたが、入鹿にとってはどこ吹く風で、新しく建てた自分の家を「宮門(みかど)」と名付けたり、自分の息子を「皇子」と呼ばせたりしました。まさにやりたい放題です。

そんな中で、自らの権力に驕(おご)れる入鹿を忌々(いまいま)しげに見つめる、二人の人影がありました。彼らは一体誰なのでしょう。

皆さんは、蹴鞠(けまり)についてご存知ですか。

7世紀前半までに、中華から我が国に伝わったとされる伝説があり、貴族から武士、そして一般民衆に至るまで幅広く親しまれました。一般的には優雅な遊びと見られていますが、鞠(まり)を高く蹴りあげるなど、かなりの技術と体力を有する競技でもあります。

蘇我入鹿が強大な権力を握っていたある日のこと、飛鳥(あすか)の法興寺(ほうこうじ)の広場で、蹴鞠の会が盛大に行われていました。一人の若い男性の皇子が高く鞠を蹴り上げたとき、勢いあまって履(くつ)が脱げて、鞠とともに宙を舞いました。

履は、ある一人の男性の目の前に落ちました。男はすぐに履を拾い上げると、両手でささげるようにして持ちました。皇子の前まで行くと男はひざまずき、恭(うやうや)しく履を差し出しました。皇子も男の前でひざまずき、互いに目を見合わせ、笑みをかわしました。

これこそが、我が国の歴史の大きな転換点となった「大化の改新」を成し遂げた二人の男である、中大兄皇子(なかのおおえのおうじ)と中臣鎌足(なかとみのかまたり)の記念すべき出会いだった、と伝えられています。

中大兄皇子は、舒明天皇を父に、皇極天皇を母に持ち、次期天皇の有力候補者と見られていましたが、蘇我入鹿は自分の言いなりだった古人大兄皇子(ふるひとのおおえのおうじ)を後継として立てるつもりでいました。

幼少時から優秀かつ果敢な性格を称(たた)えられていた中大兄皇子にとっては、自分も将来は山背大兄王のような目にあうかもしれない、という思いと、何よりも蘇我氏による専横をこれ以上黙って見ていられない、という強い危機感とを持っていました。

中臣鎌足は、代々神事を担当した中臣氏の一族でしたが、我が国で仏教を受け入れるかどうかの問題で、物部氏(もののべし)と共に蘇我氏と対立し、以後は勢力が弱まっていた。彼もまた、蘇我氏のやりたい放題をこのまま見過ごしておけない、という使命感に燃えていたのです。

蹴鞠の会によって出会うべくして出会った二人は、留学生として隋へ渡り、唐になってから帰国した南淵請安(みなぶちのしょうあん)から教を請うという形で何度も密会し、蘇我氏打倒の作戦を練り続けていました。

二人は、蘇我氏の一族でありながら入鹿の専横を憎んでいた蘇我倉山田石川麻呂(そがのくらやまだのいしかわまる)を味方に引き入れることに成功し、石川麻呂の娘が中大兄皇子の妃(きさき)となりました。

2. 大化の改新への道のり

蘇我氏の打倒を虎視眈々(こしたんたん)とうかがっていた中大兄皇子と中臣鎌足に、絶好の機会が訪れました。朝鮮半島からの使者が貢物(みつぎもの)を届けるために来日し、天皇に面会する儀式が行われることになったのです。

朝廷にとって重要な行事ですから、大臣(おおおみ)の蘇我入鹿も必ず出席します。これを好機と見た二人は、儀式の途中で入鹿を殺害する計画を立て、当日までに刺客を二人準備して、彼らとともに儀式が行われる大極殿(たいごくでん)の物陰に隠れました。

すべての準備を終えた645年6月12日、大雨が降る中で儀式が始まり、朝鮮半島からの上表文を、蘇我倉山田石川麻呂が読み始めました。事前に練られた計画では、上表文を読んでいる途中で刺客が飛び出し、入鹿を亡き者にする手はずでした。

ところが、肝心の刺客たちが出てきません。極度の緊張と、入鹿の尊大さに怖気(おじけ)づいてしまっていたのです。「このままではまずい」。鎌足の顔に焦りが浮かび始めました。

なかなか出てこない刺客たちに、上表文を読んでいた石川麻呂も焦り出しました。上表文に残された文字は、あと数行分しか残されていません。

「あと少しで読み終わってしまう」。焦った石川麻呂の声が乱れ、両手もガタガタ震え出すなど、誰が見ても明らかに動揺し始めました。その様子を不審に思った入鹿が、石川麻呂に声をかけまし

た。

入鹿「どうして震えているのだ！」

石川麻呂「へ、陛下の御前(おんまえ)ですから、ふ、不覚にも緊張しまして…」

しどろもどろで返答する石川麻呂に対して、入鹿がさらに不信感を持ちました。このままでは計画が失敗するどころか、すべてが発覚してしまうのが目に見えていました。

「だめだ。もはやこれまでか」。鎌足が観念したその瞬間でした。

「ヤーッ！」

凄まじい気合とともに、手に剣を持った一人の若者が飛び出しました。この若者こそが、中大兄皇子その人でした。皇子が入鹿に向かって突進すると、はじかれたように刺客たちも駆け出しました。入鹿は皇子を含んだ三人がかりで攻められ、激しく斬りつけられました。

瀕死(ひんし)の重傷を負った入鹿は、皇極天皇に向かって命乞(いのちご)いをしました。

「なぜ俺がこんな目に…。何の罪があるというのだ…」。

目の前で繰り広げられた大惨事に、皇極天皇は思わず大声を上げられました。

「何事ですか、これは！」

天皇の息子である中大兄皇子は、母の皇極天皇の前へ進み出ると、きっぱりと理由を述べました。

「蘇我入鹿は皇族を滅ぼして自分が皇位につこうとした大悪人ですから、誅殺(ちゅうさつ)したまでのことです」。

理由を聞かれた皇極天皇は、黙って席を立たれました。その間に刺客たちが入鹿に止めを刺し、ついに入鹿は殺害されてしまいました。

入鹿の死は、直ちに父親の蘇我蝦夷にも伝えられました。配下の者が逆賊になるのを恐れて次々と朝廷に投降していく姿を見た蝦夷は抵抗をあきらめ、翌日に屋敷に火をかけて自殺しました。こうして栄華を極めた蘇我氏の本家は、わずか一昼夜で滅亡してしまったのです。

なお、最近の教科書などでは、大化の改新のきっかけとなった蝦夷・入鹿親子が滅ぼされた一連の政変のみを取り上げ、わざわざ「乙巳(いっし)の変」と紹介しているのが目立っているようです。

乙巳の変が起きた直後に、皇極天皇は孝徳(こうとく)天皇に譲位されました。生前での天皇のご譲位は初めてのことです。中大兄皇子は孝徳天皇の皇太子となり、政治の全般を担当することになりました。

中大兄皇子は都を難波(なにわ、現在の大阪市)に移すと、我が国史上初めての元号となる「大化(たいか)」を制定し、645年は「大化元年」となりました。

続いて朝廷内の役職の改革に着手した中大兄皇子は、それまでの大臣(おおおみ)・大連(おおむらじ)の制度を廃止し、新たに左大臣・右大臣・内臣(うちつおみ)の制度を設けました。そして、左大臣には阿部内麻呂(あべのうまろ)、右大臣には蘇我倉山田石川麻呂、内臣には中臣鎌足がそれぞれ任じられました。

翌大化2(646)年正月に、中大兄皇子は強固な中央集権体制における国家をつくるための大原則をうたった「改新の詔(みことり)」を公布し、公地公民制など、聖徳太子以来の朝廷の悲願の実現に向けて大きく前進しました。今日では、こうした一連の国政の改革を総称して「大化の改新」と呼ばれているようです。

さて、大化の改新によって新たな政治を実行しようとした中大兄皇子でしたが、改革は必ずしも順調に行われたわけではありませんでした。理想に燃えた皇子でしたが、性急な改革は現実とかけ離れることが多く、伝統を重んじる他の有力者との間には、いつしかすきま風が吹き始めていました。

例えば、中大兄皇子が新たな冠位制度を導入した際に、左大臣の阿部内麻呂と右大臣の蘇我倉山田石川麻呂が、新しい冠の着用を拒否しています。これが遠因となったのか、649年に阿部内麻呂が病死すると、その直後に石川麻呂が朝廷への謀反を疑われて自殺に追い込まれました。

また、中大兄皇子は孝徳天皇と不和になり、653年に中大兄皇子が飛鳥へ戻ると、有力な家臣が次々とこれに従い、孝徳天皇は難波の都に取り残されて、翌年に寂しく崩御されました。

中大兄皇子は次の天皇に自らが即位せず、母親の皇極天皇が再び皇位につかれて、斉明(さいめい)天皇とられました。なお、一度退位された天皇が再び即位されることを重祚(ちょうそ)といいます。

このようにして、中大兄皇子が様々な矛盾を抱えながら政治を実行している間に、東アジアの情勢は風雲急を告げていました。

3. 白村江の悲劇

隋が滅んだ後に建国された唐は、朝鮮半島全体を支配下に置くことを考え、手始めに陸続きだった高句麗(こうくり)を攻めました。高句麗は唐の猛攻をはね返しながら、後顧の憂いをなくすため、百済(くだら)と結んで新羅(しらぎ)を攻め立てました。

こうなると困ったのは新羅です。高句麗と百済の両方から攻められたうえに、我が国の支援も得ら

れず、追いつめられた新羅は、起死回生の策として唐との軍事同盟を選択しましたが、これは、ある意味非常に危険な賭けでした。

新羅が唐と同盟を結べば、間に挟まれた高句麗や百済と戦いやすくなるはありますが、問題はその後です。高句麗や百済が滅んだ後は、唐と新羅の両国が残されます。ということは、唐は新羅のみを相手に、じっくりと時間をかけて滅ぼすことが可能となるわけです。

その後の展開が読めていた唐は、新羅からの誘いを喜んで受けました。唐から見て、遠く（＝新羅）の相手と結んで、近く（＝高句麗・百済）の敵を倒す、という政策のことを、遠交近攻といいます。

一方、新羅にしてみれば、将来の不安よりも、「今そこにある危機」の打開のためには、やむを得ない選択でした。そして新羅は、唐の信頼を得るために、常識では考えられない政策を始めるのです。

新羅は自国の滅亡を免れるために、敢えて唐と同盟を結びました。しかし、それは表向き「唐の属国」となることを意味していたのです。新羅は属国であることをアピールするために、自国の文化をかなぐり捨て、唐の真似をすることを始めました。

つまり、民族の風俗や服装、官制や年号だけでなく、名前のあり方（名字を漢字一文字に変えました）に至るまで、すべてを中華風に改めたのです。

百済の有名な将軍である鬼室福信(きしつ・ふくしん)がそうであったように、それまでの新羅を含む朝鮮半島の人々の名字は、我が国の姓(かばね)である「中臣」「物部」などと同じく「二文字」が基本でした。

しかし、これ以降の新羅では、当時の武烈王(ぶれつおう)が本名を「金春秋(きん・しゅんじゅう)」と名乗るなど、名字を漢字一文字に統一し、これは現代でも「朴槿恵(パク・クネ)」「李明博(イ・ミョンバク)」あるいは「金正恩(キム・ジョンウン)」のように、全く変わっていません。

この後、新羅は唐を追い出して統一国家を創立することに成功しますが、文化的には完全に中華に背骨をつくり変えられてしまっており、この点が、公地公民といった律令制を中華からほぼ完全なカタチで輸入しても、日本文明の基本を一切変えなかった我が国との非常に大きな違いといえるでしょう。

さて、生き残りのために自国の文化をすべて中華風に改めた新羅には、独立国としての面影が全く存在しませんでした。たとえ「唐のコピー」となることがどれだけ屈辱的であろうが、国が滅びては意味がありません。まさになりふりかまわぬ究極の策といえました。

こうして唐と同盟を結んだ新羅は、やがて反撃に転じました。660年には唐と共同で百済を攻め、首都を落とされた百済は滅亡してしまいました。

百済の遺臣たちの多くは、かねてから同盟を結んでいた我が国に逃れ、百済の復興を訴えました。彼らに同意した朝廷は、翌年の661年に斉明天皇ご自身が先頭となって軍勢を率いて、百済救済のために九州へ向けて出発しました。

しかし、斉明天皇は九州から動けぬまま、病のためにその年の夏に68歳で崩御されました。斉明天皇の崩御後は、中大兄皇子が即位しないままで政治を行いました。これを称制(しょうせい)といいます。

我が国と旧百済の軍勢は海を渡り、663年に朝鮮半島の白村江(はくすきのえ、または「はくそんこう」)で唐・新羅の連合軍と激突しましたが、戦いは我が国側の大敗で終わりました。百済の復興は夢と消え、我が国も朝鮮半島への足がかりを完全に失ってしまいました。この戦いを「白村江の戦い」といいます。

白村江の戦いの敗北によって、百済の王族以下多くの人々が我が国に亡命し、その後帰化しました。我が国は唐や新羅の報復を恐れて、国境沿いの対馬(つしま)や壱岐(いき)、筑紫(つくし)に当時の兵士にあたる防人(さきもり)を置いたり、九州北部の行政機関であった大宰府(ださいふ)に大規模な水城(みづき=大宰府を守るための堀や土塁のこと)を築いたりしました。

なお、水城は今もその多くが残存しており、現地(福岡県太宰府市)に行けば当時の様子が容易に分かります。

さて、朝鮮半島では668年に高句麗が滅ぼされた後、ついに唐と新羅とが国境を接して争う事態となりました。我が国にも緊張感が高まりましたが、結局は唐や新羅が我が国に攻め寄せることはなく、逆に新羅が我が国の後ろ盾を求めて、唐へ朝貢すると同時に、我が国へも朝貢するようになりました。

新羅は旧百済領を唐と争ってこれを奪い、旧高句麗領の南半分とともに自領として朝鮮半島の統一に成功すると、その後は唐に対して謝罪外交と小競り合いを繰り返すなど、唐と交戦状態に入ってから和戦をうまく使い、巧妙な外交を展開しました。

その後、旧高句麗領の北部を中心に渤海(ぼっかい)が建国されたり、唐自体の内乱もあつたりして、兵を集中できなくなった唐は、朝鮮半島の支配をあきらめ、やがては新羅の存在を認めたのでした。

長いあいだ勢力争いが続いた朝鮮半島は、結局は新羅による統一で幕を下ろしました。我が国は任那(みまな)や百済の問題などで、新羅とはかねてより敵対関係にありましたが、状況が変化すると、新羅は手のひらをかえして、我が国に朝貢するなど後ろ盾として頼るようになり、また我が国も新羅を防波堤とすることで、唐の侵略を受けるのを防ぐことができました。

要するに、新羅は自国の生き残りのために唐と同盟を結び、唐と共に我が国と戦って勝利するや、今度は唐を裏切って我が国に朝貢して接近するという、いわゆる「二枚舌外交」を貫き通したので、新羅によるこうした姿勢こそが、現在の朝鮮半島的情勢を、本当の意味で理解する流れにもつ

ながるといえるのではないのでしょうか。

島国である我が国は、朝鮮半島に大陸の属国ではない、強力な独立国が存在している間は、大陸からの侵略を受けずに済んできたのですが、今回の例も、まさにその原則どおりとなりました。

我が国が原則どおりに行動できた背景の一つに、新羅との友好関係の構築が挙げられます。百済との関係が深かった我が国にとって、それまでの外交姿勢を 180 度転換させるような政策は、そう簡単にできるものではありませんでした。

しかし、実際に 7 世紀後半には遣唐使が行われなかわりに、遣新羅使(けんしらぎし)が短期間に何度も行われているのです。我が国がそこまでの政策転換ができた理由は何だったのでしょうか。

その背景には、白村江の戦いの後の外交路線を、「反新羅」でいくのか、あるいは「親新羅」でいくのかで対立した、「兄弟」による骨肉の争いがあったのです。

4. 壬申の乱とその後の情勢

667 年、中大兄皇子は都を飛鳥から近江の大津に遷(うつ)しました。遷都(せんと)の理由は詳しくは分かりませんが、新たな政治体制をつくるため、既存の勢力が強い飛鳥から思い切って遷ったからとも、あるいは唐などの諸外国から攻められた場合に、移動しやすいように交通の便が良い場所を選んだからとも思われます。

そして翌 668 年正月、中大兄皇子は 43 歳でようやく天智(てんじ)天皇として即位されましたが、このご即位も決してスムーズに行われたわけではありませんでした。

同じ 668 年に、新羅の僧である道行(どうぎょう)が、三種の神器(=天皇であることを証明する大事な神器のこと)の一つである草薙(くさなぎ)の剣を盗むという事件がおきました。道行は新羅まで逃げようとしたのですが、途中で嵐にあって失敗に終わりました。

この事件は、新羅が天智天皇のご即位を妨害しようとした事実の一つとされています。天智天皇はかつて百済再興をめざして白村江の戦いを起こされました。ということは、天智天皇が、百済を滅ぼした新羅に対して良い感情をお持ちでないことは明らかだったのです。

ご即位後にいきなり不祥事に巻き込まれた天智天皇でしたが、着々と国内の改革を進められました。

まず、668 年に我が国で初の本格的な法令となる近江令(おうみりょう)を、中臣鎌足らとともに制定したとされています。ただ、近江令は現存せず、近年ではその存在を疑われている一面もあります。続いて 670 年には、公地公民制への準備として、我が国初の全国的な戸籍である庚午年籍(こうごねんじゃく)がつくられました。

また、671 年には漏刻(ろうこく)、つまり水時計が宮廷内に設置され、正確な時を告げるようになった

とされています。この日は今の暦に直すと 6 月 10 日であり、「時の記念日」として有名ですね。

こうした一方で、天智天皇のご在位中に、中臣鎌足が 669 年に 56 歳で亡くなりました。鎌足の死の直前に、天智天皇は大織冠(だいしょくかん)の地位と「藤原」の姓を授けられました。鎌足は死後に「藤原鎌足(ふじわらのかまたり)」と呼ばれ、我が国の歴史にその名を残す藤原氏の始祖となったのです。

ところで、天智天皇には後継者として二人の人物がいました。息子である大友皇子(おおとものおうじ)と、弟である大海人皇子(おおあまのおうじ)です。このうち、大友皇子は父同様に「反新羅」の外交路線を継承する考えだったようですが、大海人皇子は「親新羅」路線への転換を考えていました。

我が国とかかわりの深い任那や百済を滅ぼした新羅は確かに憎いですが、その新羅が朝鮮半島を統一しようとする勢いである現状を考えれば、我が国の唐に対する防波堤の意味も込めて、一切のしがらみを捨てて新羅と「大人の関係」を結ぼうというのがその真意でした。

しかし、こうした「現実的」な考えは、「新羅憎し」の感情を優先させる天智天皇や大友皇子には受け入れられず、両者はいつしか対立するようになりました。そして 671 年 10 月、天智天皇は大海人皇子を宮廷内に呼びつけられると、「天皇の地位を譲る」と仰られました。

「これは畏(わな)だ」と直感した大海人皇子はこの誘いを断り、直ちに出家して吉野へ向かい、政治的野心のないことをアピールしました。

天智天皇は、同じ年の 12 月に 46 歳で崩御されました。天皇の崩御は、単なる後継争いのみならず、我が国の今後の外交路線も含めた大きな流れの中で、避けることの出来ない波乱の予感を漂(ただよ)わせていました。

天智天皇の崩御後は、大友皇子が政治の実権を握られましたが、まだ 24 歳と若い後継者は、父ほどの器量をお持ちでおられず、政情不安が尽きませんでした。様子を見ていた大海人皇子は、672 年 6 月に吉野を出立して美濃へ逃れ、近江朝廷に対して反旗を翻(ひるがえ)しました。

東国の兵士を味方に付けた大海人皇子は、近江や大和へ向かって軍を進めました。近江朝廷側も善戦しましたが、結局は敗北し、大友皇子は自殺しました。大海人皇子が大友皇子を破ったこの戦いを、当時の十干十二支(じっかんじゅうにし)から「壬申の乱」といいます。

大海人皇子が勝利できた最大の原因は、東国の下級役人や地方豪族が皇子に従ったからでした。一方、大友皇子は西国に対して自分の味方になるように説得しましたが、いずれも拒否されました。なぜこのようなことになったのでしょうか。

その理由の一つとしては、天智・大友父子の「反新羅」の外交政策に対する反発が挙げられます。我が国の未来のために、恩讐を越えて新羅との関係を修復しようとする大海人皇子の考えが全国に受け入れられたといえるでしょう。

では、もう一つの理由とは何でしょうか？

大海人皇子が勝利した理由のもう一つは、「改新事業への支持」が考えられます。白村江の戦いに敗れて窮地(きゆうち)に陥(おちい)った天智天皇(当時は中大兄皇子)は、大化の改新によって土地や人民を取り上げられたことで不満の高まっていた中央の豪族と妥協するために、人民の私有を復活させましたが、これは明らかな改新事業の後退でした。

一方、民衆の考えに近い下級役人や地方豪族の立場からすれば、中央豪族の私有に甘んじるよりも、大海人皇子を支持して彼の下で国づくりを進めた方が、遥(はる)かに理想的といえました。

これらの理由があったからこそ、一種のクーデターともいえる壬申の乱が成功したのでしょう。なお、大友皇子は、壬申の乱から約1200年後に、明治政府によって「弘文(こうぶん)天皇」の名を贈られています。

壬申の乱の後、大海人皇子は都を飛鳥に戻して、飛鳥浄御原宮(あすかきよみはらのみや)で即位され、天武(てんむ)天皇とされました。

天武天皇は、大臣(おおおみ)を置かずに自らが先頭に立たれて政治を行われました。豪族による私有地と私有民の廃止を徹底し、684年には、皇族出身者を中心とする新しい身分秩序である八色(やくさ)の姓(かばね)を定められました。

その他にも、中華の法体系にならった律令や、我が国の歴史書である国史の編纂(へんさん)を開始されたり、我が国初の銭貨(せんか)となる富本銭(ふほんせん)の鑄造を行われたりしました。

外交面では新羅との国交を回復させ、遣新羅使を何度も派遣される一方で、唐との国交を一時的に断絶されました。この結果、我が国は新羅という独立国家をはさんで、唐との外交関係修復に時間を費やすことができたのです。なお、遣唐使の復活は8世紀当初まで待つことになります。

また、天武天皇は自身(=天皇)が中心となる力強い国家体制の確立を目指されて、中華の都城(とじょう)にならった本格的な宮都である藤原京(ふじわらきょう)の造営を開始されるなど、様々な政策を行われましたが、こうした大胆な改革を実現できたのも、壬申の乱によって中央の豪族などの「抵抗勢力」を排除したことで、改新への事業が勢いづいたからだと考えられます。

天武天皇は、藤原京の完成を見られることなく686年に崩御されましたが、天皇のご遺志は皇后の持統(じとう)天皇らに引き継がれ、701年には我が国初の本格的な法令である大宝律令(たいほうりつりょう)が制定されるなど、東アジアの有力国である「日本」の国づくりの事業が完成しました。

ところで、我が国の「日本」という国号は、689年につくられた飛鳥浄御原令(あすかきよみはらりょう)によって正式に定められたと考えられていますが、それから約1300年以上を経た現代まで、この国名は全く変わることなく使われ続けています。

チャイナや朝鮮半島などの国々が、王朝が変わるごとに国名が変わってきたことと比較すると、それが特別のことであるのが理解できますね。

我が国の国名が長い年月のあいだ変わっていないのは、チャイナや朝鮮半島などのように王朝が変わって国が途絶えたり、あるいは他の民族にとってかわられたりすることがなかったからです。我が国は世界でもっとも長い歴史を持つ国なのです。

私たち日本国民は、我が国の悠久の歴史を誇りに思うと同時に、子々孫々に至るまで繁栄させるための努力を重ねなければなりません。混迷続く今の中であればこそ、一人ひとりの覚悟が問われているのではないのでしょうか。（完）

主要参考文献：「日本の歴史1 古代篇」（著者：渡部昇一 出版：ワック）
「逆説の日本史2 古代怨霊編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）

<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379413>

YouTube 再生リスト「大化の改新と壬申の乱」

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML4M6fbtuGgeQRTK-2nOuHt6>

黒田裕樹の歴史講座

<http://rocky96.blog10.fc2.com/>